

虹

に

「奇跡」をつなぐ熱意

205 となみ演劇鑑賞会の歩み

演劇界で「奇跡」と呼ばれる団体がある。俳優座や文化座など名だたる劇団を砺波市文化会館に迎え、公演を鑑賞する会員制の団体「となみ演劇鑑賞会」だ。

演劇鑑賞会(演鑑)の前身となる団体は戦後間もない頃に誕生。現在は全国に100を超える団体があり、県内には富山、高岡、魚津と合わせて4団体。全国で会員が減少する中、となみは25年近く会員を増やし続けている。1300人余りの会員数は中部・北陸ブロックで名古屋に次ぐ。

なぜ人口が少ない地域で「奇跡」が起きているのか。劇団や演鑑の関係者が口をそろえて挙げるのが、事務局の上田良子さん(75)＝砺波市＝の存在だ。

◇

「今日ね、すっごいうれしかったのが、この服」。2月末となみ演鑑の事務所会議室で開かれた会合で、上田さんが着ている服に手を当てて話を始めた。長机を囲んで座る会員ら15人が聞き入る。

「窮屈になって、しまっとった服を出したわけ。そしたら、ぶかぶかで。こんなうれしいことないの」。年配の女性たちから笑いが起き、空気が和む。進行役が「楽しくやってみましょう」と言って、出席者が順番に自己紹介していく。

集まっているのは、4月の公演の運営を担当するグループの代表者たち。前回の公演より会員を増やす目標を掲げるが、容易ではない。参加者からは「声をかけても、『他の趣味にお金を使いたい』って言われて」「『耳が遠くなった』と退会された」という声が漏れ、周りが「そうそう」とうなずく。上田さんは「断るのが上手よね。あの手この手で」と笑いを誘い、演鑑の課題を挙げていく。

全国の会員数は1996年のピーク時に28万7000人を超えたが、昨年時点で8万5000人ほど。解散したり、公演回数を減らしたりする団体もある。「演鑑が力を落とすと、劇団は新しい作品ができず、セットも貧弱になっていく」と説明し「だから一人でも会員を増やして劇団を迎える気持ちで取り組んでいるの。われわれと劇団は車の両輪。お互い支え合っていかなきゃいけない」と呼びかけた。

◇

上田さんの生まれは大阪市。小学生の頃に小矢部市に引っ越した。父の仕事の関係

で一家は東京に引っ越すことになり、上田さんは砺波女子高校から都内の大学に入学する予定だった。だが、人で混み合う都会に暮らすのが嫌で、地元に残ってスポーツ用品メーカーに就職した。

会社でのニックネームは「ストロンガー」。社長たちからはストレスに強い社員だとみられていた。海外事業などを担当し、出張で国内外を飛び回った。

同じ会社で働く10歳年上の登昭さんと結婚し、長女を出産してから仕事も続けた。長女が入ったガールスカウトで地元のリーダーも務め、忙しい日が続いた。

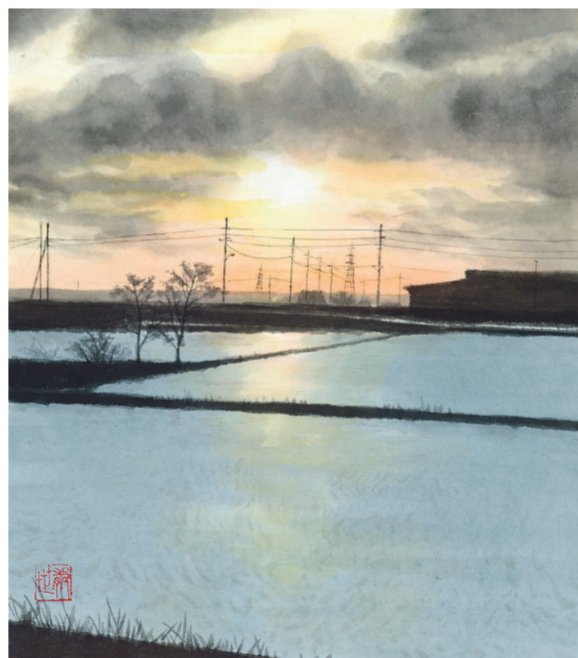
同居する義父母の病気の世話が必要になったことなどから、50歳で会社を退職した。そんな時、となみ演鑑から「事務の仕事を手伝ってほしい」と声がかかる。演劇好きの長女に誘われて会員になっていたものの、演劇には全く興味がなかった。「手伝

曲をみんなで歌う機会を設けるなど、楽しみながら学べるように工夫を重ねた。

演鑑以外の公演も鑑賞した。こまつ座(東京)の『紙屋町さくらホテル』は笑えて泣ける舞台で、「芝居がこんなにも人の心を揺さぶるものなんだと感じた」と振り返る。その頃から、仕事に自然と熱が入るようになっていった。

事務局のOA化も進めた。当時の事務は全てが手作業。「会社より30年ぐらい時代が遅れている」と思い、パソコンを導入した。他の演鑑の事務局長からは「仕事は機械ですものじゃない」と言われたが、上田さんは「空いた時間で人と接する方が大事」と意に介さなかった。事務局を訪れた会員の話を聞き、会合に出られない人に電話する。劇団とも交流を深めていった。

となみ演鑑の設立メンバーの一人で、前代表理事の仙田國明さん(79)＝砺波市＝は



「田水張る」 広田郁世

いぐらいなら」と、引き受けた。

◇

「あなたは何も分かってない」。全国の演鑑や劇団の関係者200～300人が一堂に会する場で、上田さんは批判を浴びた。事務局長になって間もない頃。会員を拡大する活動について「芝居を楽しみたいだけなのに、何で難しいことをしなきゃいけないのか」と発言したため、やり玉に挙がったのだ。

悔しくて、帰りの電車で涙が流れた。負けん気に火がついた。演劇鑑賞の歴史を記した本に目を通し、先進団体の会報などを読みあさり、全国やブロックの会議に出席して話を聞いた。「自分一人だけではなく、みんなを巻き込んでいくことが課題」と考え、学んだことを資料にまとめ、研修で役員たちと共有した。ガールスカウトの手法を取り入れ、研修の合間にミュージカルの

「上田さんは勉強家で話の説得力があるから、みんな納得する。企業で鍛えられた経験を生かし、目標達成に向けて着実に実践するところがすごい」と評する。

◇

2020年、コロナ禍が襲う。人が集まることができない状況で、となみ演鑑の医療従事者の会員からは活動停止や解散を求める声が上がった。

上田さんは出演予定の劇団に何度も連絡を入れた。公演できるのか、できないのか。電話の向こうで、担当者が言った。「上田さんの命も大事、でも僕は自分のところの俳優たちの命も大事なんだ」

となみ演鑑の役員たちは、関わりのある20劇団に寄せ書きを送った。「演劇を渴望しています」「お芝居は人生へのおくりもの。待ってます」とメッセージを記した。



会員らと公演の感想を語る 上田さん(右)

2公演は延期されたものの、中止せずに上演された。となみ演鑑はコロナ禍でも会員を減らさなかった。

劇団民藝(川崎市)の代表取締役、白川浩司さん(52)は「『北陸の奇跡』と呼ばれるのは、上田さんの人間力と、周りの役員の方たちが綿密な話し合いをして劇団を迎えてくれているからだだと思います。劇団にとって、演鑑は『未来』なんです」

◇

「私は負けない」。上田さんが毎日声に出し、自分に言い聞かせている言葉だ。人はつらいときに簡単にくじけてしまうからだ。

演鑑の仕事に関わって四半世紀。一番苦しい時期は、常に「今」だ。会員数を増やし続けてきた記録が途切れるのが怖い。劇団からは「となみが大丈夫な間は日本の演劇は大丈夫」と期待され、他の演鑑から目標にされ、プレッシャーがかかる。

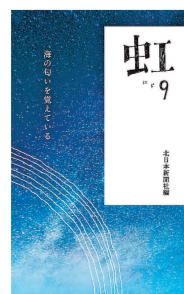
高齢化や人口減少が進み、となみ演鑑内には「いつまで会員を増やし続けなければいけないのか」という声もある。だが、上田さんは「定年で時間に余裕がある人は湯水のように湧くのよ。人生100年時代、足元さえ元気なら、芝居を観に来れる」と会員たちを励ます。引きこもりがちな高齢者が外出する機会につながることもあり、演鑑のつながりの大切さを感じている。

上田さんが好きなのは、公演が終わって会員たちが感動した表情で会場を出てくるのを見る時間。「芝居は元気を与えてくれるんですよ。日常の中で豊かさを感じてくれるといいな」とほほ笑む。

4月の公演『グレイクリスマス』では新規会員が48人、前回より3人増えて1352人となった。直前まで3人足りなかったが、会員たちの最後の追い込みで目標をクリアした。「観劇を楽しむだけでなく、みんなで目標を達成し、誘った人が演劇を楽しんでいるのを見ると、喜びが二重にも三重にもなるんです」

公演の一つ終えても、次の公演に向けた準備は始まっている。記録更新のプレッシャーは続く。だから、上田さんはまた自分に語りかける。「私は負けない」

上田さんは30代後半の頃、病気で3度も危篤状態となったそうです。退院した時、夫から言われたのが「これからは人のために、その命を使いなさい」。となみ演鑑での活動は、上田さんの多くの経験が集約した証しのように感じます。



「虹」第9集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えている』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773
mail niji@kitanippon.jp
次回掲載は6月1日(月)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社
メディアビジネス局